

『こどものとも』に表れた性差 2

—性別役割意識と労働観—

武田京子*
(2000年1月7日受理)

Kyoko TAKEDA

A Gender Gap in "KODOMONOTOMO" 2

月刊物語絵本『こどものとも』創刊号から514号を資料とし、女性の社会的地位向上と深くかかわりをもつ、性別役割分業と労働への意識の変化が『こどものとも』にどのように反映しているかを分析考察した。

社会の動きに少し遅れながらも、固定化した性別役割意識は薄れつつあるが、日常生活を題材に絵本化される例は少ないことがわかった。

[キーワード] 月刊絵本, ジェンダー, 性別役割分業,

1. はじめに

月刊物語絵本『こどものとも』は、1956年に創刊され現在まで継続して刊行されている。前報¹⁾では作者及び主人公の性差に着目して考察を行い、女性の社会進出にともない『こどものとも』のテキスト(文章)や絵(イラスト)に女性がかかわることが多くなり、主人公の男女比は男性優位から均衡へ変化しているという結果を得た。これは、女性の社会的な進出に伴う、地位向上の現れと考えることが出来る。しかし、増加した女性主人公は、個性的で活力にあふれる女の子像・おばあさん像が多く、働く女性像はごく少数に限られている。老人への関心の高まりは、わが国の高齢化社会への突入と関連していると考えられるが、働く女性が描かれないうことへの疑問が生じた。

そこで本研究では、テキストの中には表現されないイラストの中にかくされたメッセージにも着目しながら、女性の社会的地位向上に関連のある性別役割分業と労働への意識の変化が、『こどものとも』にどのように反映しているかを分析考察した。

* 岩手大学教育学部家政科

2. 性別役割分業と女性労働

社会の基盤となっている原理の中で、性差（ジェンダー）は重要なものの一つであり、性別役割分業のない社会は存在しないといつて良い。性別役割分業には生物学的な性差による自然的分業と社会・文化的性差による習慣的分業があるが、その区別は付けにくい。

上野によると性分業は根拠のある分業ではなく、(1)特定の活動が男性に独占され、そこから女性が排除されていること、(2)この活動によってしばしば男性が定義されていること、(3)男性が独占している活動は一般に女性に割り当てられている活動より価値が高いと見なされていること、という共通点がある。性分業によって女性をある活動から閉め出すことによって男性に権威と権力を集中させ男性優位の普遍性を確立させているのだが、この起源ははっきりしないともいう。同様に、男性が女性や子どもを外敵から護る役割についても、人類には天敵（捕食動物）は存在せず、人類の男性は自分自身の利益のために他の集団の男性から女性と子どもを護っている。また、新石器時代の生存レベルにある部族の実証研究によれば、当たり外れの大きい男性の狩猟による食物取得に依存するよりも、育児中であっても可能な女性の採集と小動物の狩猟による食物取得の方が着実であることを理由に、未開人の男性の狩猟に依存する性分業は近代人の作り出した神話であるという。これらの神話は、「男は仕事、女は家庭」という近代家父長制に固有の性別役割分担が成立してから後に、自然化され過去に投影されたものであると説明する²⁾。

わが国においても、妊娠、出産、授乳の生物的機能を理由に、育児は女性の役割と考えられ、女性の家庭外の労働は家計の補助として位置づけられた結果、賃金や労働条件は劣悪な状態に置かれてきた。多くの男性は家庭生活から疎外され、「男性は仕事、女性は家庭」という専業・分業化という性別役割分業がすすめられ、その結果、社会のあらゆる場で、経済効率の良い男性が女性の優位に立つという形をとり続けた。しかし、1960年代末から70年代にかけての「ウーマン・リヴ」と呼ばれる新しい女性解放運動を契機に、世界的に女性の地位向上を図る運動が起こった。わが国もこの動きに同調し、1985年「男女雇用機会均等法」を制定し、現在、男女共同参画社会の実現のための動きは継続しているが、性別役割分業意識には根強いものがあるのが現状である（図1）³⁾。「男は仕事、女は家庭」

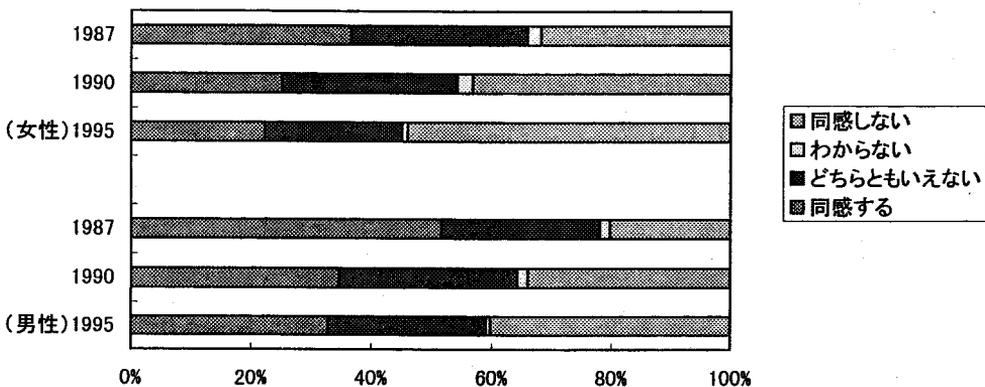


図1 「男は仕事、女は家庭」という考え方について

という考えについて、1987、90、95年の調査を比較すると、男女とも「同感する」と答えた割合は低下しているが、男性は95年調査においても、「同感する」「どちらともいえない」と答えたものが過半数に達している。

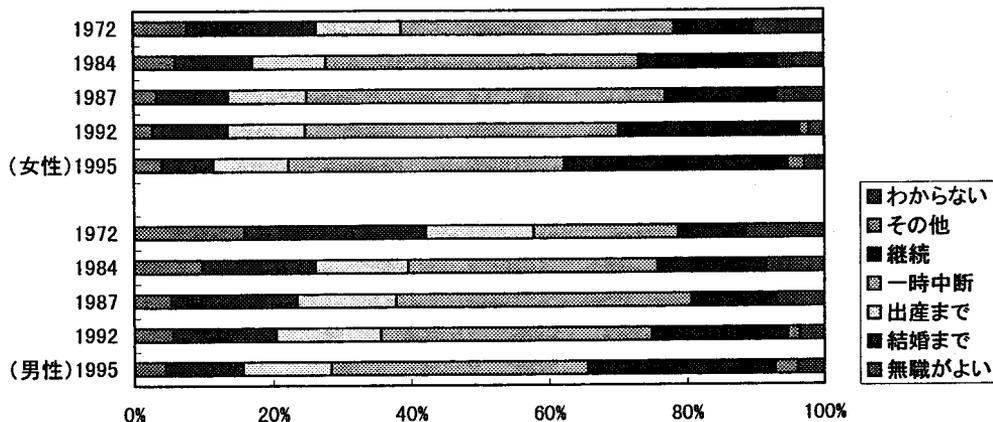


図2 女性が職業を持つことへの考え方

女性が労働に従事することを否定することはなくなったが、「出産を契機に退職し、末子が小学校へ入学した後職場へ復帰する」、一時中断型の就労形態を女性の就労パターンとして歓迎する傾向は、非常に大きい(図2)⁴⁾。女性の回答では、「子どもが出来ても、ずっと職業を続ける」と答えるものが3割以上に達し、女性の意識の変化は見られるが、男性は依然として保守的であるといえる。

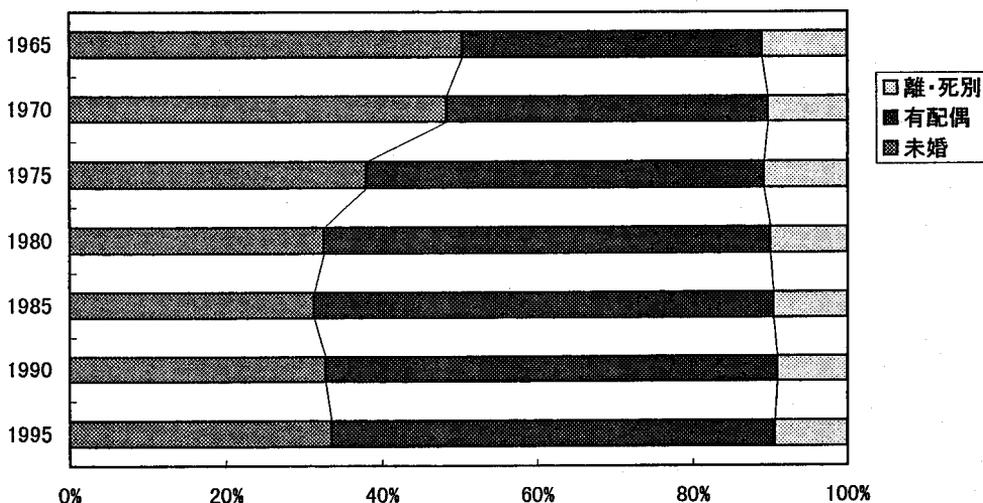


図3 配偶関係別女子雇用者の割合 (非農林業)

女性労働者については、1960年代の高度経済成長期以降、雇用者全体を占める女性の割合は増大し、特に1984年以降、有配偶・就労女性の割合は専業主婦を上回っている(図3)⁵⁾。しかし、労働条件は改善されてきてはいるものの賃金面で格差は残っており、女性の労働が依然として家計の補助であり、育児・介護の役割が女性の役割として位置づけられていると考えられる。

3. 研究の方法

前報と同様に『こどものとも』を分析対象とし、出版形式及び女性の社会進出を視点に3期に区分し、テキストとイラストの両面から分析を行った。各期間は以下の通りである。(なお、月刊誌という性格上、年度を一区切りとして考えた。)

I期：1～156号(1956.4～1969.3)「女性解放運動以前」

II期：157号～360号(1969.4～1986.3)「女性解放運動が活発化し、様々な法律が成立した」

III期：361号以降(1986.4～)「男女雇用機会均等法成立以降」

4. 結果及び考察

(1) I期

性別役割分業が固定されている時期と言える。労働を題材にした作品は「なんきょくへいったしろ」(5)、「だむのおじさんたち」(34)、「たぐぼ一とのいちにち」(39)で、いずれも科学的要素の強い作品である。「世界ではじめて創刊された、画期的な幼児向け月刊科学絵本⁶⁾」といわれる、『かがくのとも』が分離する以前で、『こどものとも』が月刊物語絵本としての性格を確立する前であること、佐久間ダム(1958年)、小河内ダム(1959年)が相次いで竣工し、黒部ダムが建設中であり、国際地球観測年に参加し1958年から1962年まで6回にわたって南極へ探検隊を派遣したことの影響から、こどもにとって身近ではない探検隊、捕鯨、ダム建設という職業がテーマになっている。登場人物のほとんどは男性である。

子どもの日常生活を描いた作品の中でも、性別役割分業は固定している。「たろうのおでかけ」(85)では、たろうは友達のみみちゃんの誕生日のお祝いに、犬や猫、アヒルと出かける。町の中を急ぐ様子が、守らなければならない交通ルールを交えながらユーモラスに語られるストーリーである。母親は手作りのアイスクリームをおみやげに持たせ、エプロンを掛け洗濯をしながら、たろうを見送る。外で出会うひとは、巡査、郵便屋、オート三輪のおじさん、すべて男性である。テキストには描かれないが、イラストでは、「男は外で仕事、女は家庭で家事労働」の様子が描かれる。(写真1) 「かいたくちのみゆきちゃん」(44)では、家族の協力が不可欠な開拓者の仕事として母親が一緒に行うのは、作物の取り入れだけである。木材の伐採は無理としても、比較的軽労働の搾乳・養鶏も父親の仕事で、母親は、食事作りとその世話をする場面にだけ登場し、しかも、家族と一緒に食卓に着いてはいるが、食事をしている様子ではない。(写真2)

昔話を題材とした、「つきをいる」(79)、「かわいいめんどり」(136)でも同様で、さら

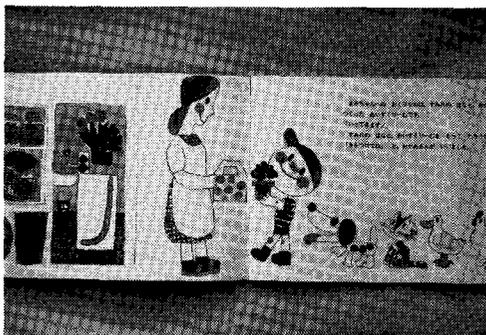


写真 1



写真 2

に性別役割意識が強調される。機織りがじょうず、きれい好きで掃除、洗濯、縫い物、編み物が好きであることが主人公の長所であったり、危機を脱する方策として使用される。めんどりは狐におそわれ、袋に入れられ連れ去られそうになる。その窮地を脱する手段として活用されるのは、いつでも肌身はなさず持っている裁縫道具で、はさみで袋を切り開き石を詰めたあと針と糸で元通りに縫っておく。最後の場面は、自分の家でいつものように編み物をしてくつろいでいる様子が描かれている。

「ぐるんぱのようちえん」(110)は、何の仕事をしても大きなものばかり作って失敗ばかりで働き先から追い出される主人公（とつても汚い・メソメソしているゾウ）が、こどもが12人もいるお母さんに頼まれて遊ぶ内に、それまでの失敗を生かして幼稚園として成功するストーリーである。一般的な労働（皿、靴、ピアノ、自動車作りなど）に失敗しても、「こどもと遊ぶこと＝育児」ならうまくできる、という女性役割に対する蔑視が感じられる。

唯一、性別役割分業から脱しているのは、「ぐりとぐら」(93)で、主人公ののねずみのきょうだいぐりとぐらはイラストから性別は判断できない。テキストの「ほくらのなまえは・・・」で男性であることがわかる。森の中で見つけた大きな卵で大きなカステラをつくり、においに引きつけられた動物達と一緒に食べるストーリーである。女性の仕事として考えられていた料理を行い、他の人にごちそうするする男性として描かれている。

(2) II期

「国連婦人の10年」を中心としたこの時期は、女性の社会的地位の向上が叫ばれ、『こどものとも』も影響を受けた。テキスト作者の数は女性が男性を一時期上回り、均衡になった。女性主人公の数は徐々に増加し、表面的には女性の進出が伺われる。内容的には依然として性別役割分業意識が明確にあるが、その中に少しずつ揺らぎが見え始めた時期ともいえる。

「ぴちこちゃんのけっこん」(180)は、きれいでかわいいネズミの女の子に対して、サル、ヘビ、ゾウなど、いろいろな動物が結婚を申し込む話である。最終的にはネズミのちゅーたと結婚し、最後の場面では花を飾った食卓に向かい合う二人の場面である。女性の幸福を結婚と位置づけ、きれいでかわいいことが女性の価値ととらえられている。(写真3)

性別役割分業は男性優位が崩れはじめることを感じさせる表現が、この時期見られるよ

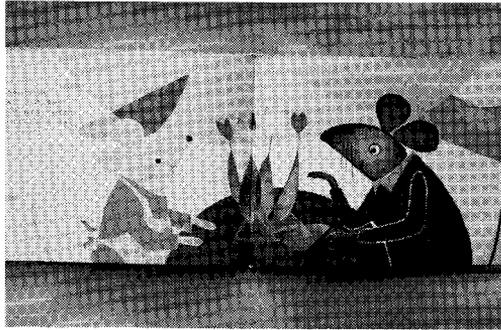


写真 3

うになった。「まぐろぎょせんてんゆうまる」(185)では、遠洋まぐろ延縄操業の厳しい仕事の世界を描き、家族で銭湯に行く様子を描いた「おふろやさん」(260)の裏表紙には、主人公ではないが、出口で連れなのでくるのを待っている女性の姿を描き、男性優位を感じさせる。しかし、「せかいいちのおんどり」(290)では変化が見られた。主人公のプライドの高いおんどりとめんどりやあひるは友達になりたいと思っているが、おんどりは拒否する。そのあとで、あひるのまねをして水浴びしようとして助けられ、対等の友達関係になる様子を描いている。「しんりんてつどう」(256)は山の上と麓の町を一日に何度も往復し材木を運び、食糧や日用品通学する子ども急病人を運ぶ、汽車の姿を描いた作品である。ストーリーの展開に大きな影響を与えてはいないが、山の駅の駅長さんは女性である。また、男女平等社会の先進国であるノルウェーの昔話をもとにした「しごとをとりかえたおやじさん」(224)は、妻の家事に文句ばかり言っている気むずかしい夫が、妻と仕事を交換してみる話である。夫は大喜びで、バター作り豚や牛の世話、子どもの世話、昼食づくりをはじめが、全部中途半端でうまくいかない。昼食に家に帰ってきた妻にあきれられるというストーリーである(写真4)。仕事を取り替えて両方がうまくいかないのであれば、性別役割の固定化につながるが、裏表紙の夫の表情から妻の家事労働の大変さを理解している様子が読みとれる。



写真 4

職業を持つ母親の姿は「いっていらっしやいってきます」(328)に初めて登場する。共働き核家族の子どもの一日を描いた作品である。しかし、画家の夫が画面の中で行う家事は、保育園へ送っていくことのみである。母親の実際の職場の様子は画面には現れず、仕事と家事の両立は負担である様子が、帰宅時の歩き方や荷物の持ち方などに感じられる。これに対して「おとうさん」(339)は、子ども二人、専業主婦のいる核家族世帯を舞台に、父親を主人公として、一日が描かれる。長時間通勤の大変な様子、会議、打ち合わせなど職場の様子は勿論あり、帰宅途中の息抜きの時間もちゃんと用意され、帰宅すれば子ども達は床につくところで、日常的な家事や育児への参加・協力は見られない。裏表紙に父親の休日サービスの情景があるが、家事育児は母親、父親は外で働く役割分業が固定している。

また、女性の職業は生活の基盤ではなく、生き甲斐として解釈される作品も作られた。「いちごばたけのちいさなおばあさん」(206)は、いちご畑の土の中に住むこびとのおばあさんがいちごの色付けの仕事をする話、「せんとくかあちゃん」(269)は、洗濯が大好きなたくましいかあちゃんの話である。洗濯は家事の一部ではなく、かあちゃんの生き甲斐になっている。家中のものを洗濯するだけでは飽きたらず、空から降りてきた薄汚れた雷様を洗い上げ、自分の好みの顔に書き直すというストーリーになっている。これらの仕事は、収入を得るという意味づけはされていないが、主人公の生き甲斐として位置づけられている。従来、代表的な家事として位置づけられていた、洗濯を主人公の生き甲斐として位置づけた作者の意図は、専業主婦や女性に対する励ましのメッセージを送ることである。「ばばあちゃんやせんとくかあちゃんを読むとチョウ元気になることうけあい。おかげで私も長生きしとる。」⁷⁾という作者の言葉からそのことがわかる。また、雷様(男性)の顔をかあちゃん(女性)が自分の好みの顔にするというプロットもこれまでは考えられなかった発想である。

職業を持つ女性を積極的に描こうとする動きが見られはじめたが、実社会で活躍する女性とは作品化されなかった。しかし、従来の女性役割への理解や解釈に変化が見られるようになった時期ともいえる。

(3) III期

「男女雇用機会均等法」の制定によって、女性の社会的地位の向上に関する運動は一段落し、性別役割分業打破についてはやや落ち着きが見られるようになった。この時期は、子どもにとって労働がどんな意味を持つものかを考えさせるような作品が表れたこと、従来の「女らしさ・男らしさ」からの解放、などが特徴といえる。

「ほくしごとに行くんだ」(371)は、お下がりにもらったツナギのズボンから自動車整備工場へ働きに行くことを思いついた主人公の話である。工場のおにいさんの手伝いをし、すっかり仕事をしたつもりになっている。実際生活に結びつく仕事をしたわけではないが、服装や行動を模倣することによって、「労働」を体験する主人公を描いている。

「ちょろりんのすてきなセーター」(369)では、寒がりやのトカゲの男の子ちょろりんは、ある日町で春のはらっぱ色のセーターを見つける。自分のほしいセーターを手に入れるために、おじいさんの仕事を徹夜で手伝う。「ねほすけスーザとあかいトマト」(470)(写真5)は、おばさんの代わりにトマト売る主人公を描いている。市場にはたくさんの店でトマトを売っており、なかなかスーザのトマトは売れないので自分で工夫した宣伝活動をはじめ



写真 5

る。この2作品は労働を自分自身の目的や生活の手段として位置づけ、読者(こども)にとって労働をより身近に感じさせるような作品といえる。また、これらの作品は、従来の男らしさ女らしさに縛られない主人公の性格付けが行われている。ちよろりんは、気に入ったセーターにこだわるおしゃれな男の子で、やっと手に入れたと思ったセーターのサイズが自分には合わないと思ったときには、おもわず涙をこぼしてしまう。スーザは朝寝坊の女の子である。昔話などでは、怠け者やねほすけは男性の性格として描かれることが多いが、ここでは女の子の性格になっている。スーザーはシリーズ化されておりその中で成長する姿も描かれている。

専業主婦のいる家庭の役割分業にも変化が見られた。弟が生まれた姉の心境を描いた「おやすみなおちゃん」(457)では、核家族世帯の父親は一人の育児担当者としての役割を実行し、主人公と遊びながらアイロンかけをしたり、お風呂に入れたりしている。作者は、性別役割分業の打破を製作の意図としていることを次のように述べている。「いざ書こうとすると、日常生活の中でおとうさんに自然にあたりまえに(特別にはなく)家事や育児を分担してもらうのは大変でした。私にとっては、ほとんど現実にそうするのと同じくらい、大変でめんどくさいものでした。それでもあえてそうするのは、家事や育児は固定観念にとらわれずに、必要に応じて分担していけたらいいと日頃思っているからです⁸⁾。」

実際に外で働く女性の姿は、「おとうさんといっしょに」(380)、「おとうさんといっしょにおばあちゃんのうちへ」(400)のように出勤風景を描くだけで、実際の職場風景は見られない。仕事を持つ母親の日常生活を描こうとすると、家事と仕事の両立が目の前の課題であり、作品にすると悲壮感がともない、子どもにとって成長のモデルとしての意義が見だしにくいことも理由として考えられる。自営業の母親の日常生活についても同様のことがいえる。「ふくのゆのけいちゃん」(446)はおふろやさんの家庭の日常生活を描いている。ここでも母親は家事と家業でてんてこ舞いしている。母親は風呂場の掃除、風呂焚きの手伝い、番台と並行しながら家事をしている。父親は重要な仕事である薪づくりと風呂焚きを専門にするのは当たり前だが、家事を手伝う様子は見られない。

職業を持つおばあさんや家事や仕事から解放されたおばあさんが、主人公としてパワフルにエネルギーに描かれた。「カンジカおばあさんのおきやくになつたうさぎ」(456)は、東シベリアの少数民族エヴェンキの民話をもとにつくられた。この民族の中では猟に対する性的なタブーがないのか、おばあさんでも女性が猟師として登場する。「おなべおなべ

にえたかな」(468)のおおばあちゃんは、山向こうの何でも治せる山のお医者さんである。スープを煮ている最中にコガラスののどに刺さった骨をとるために呼ばれていく。おばあさんという設定にしたのは、現実の生活の中で仕事を持つ母親を作品化する困難さの解決方法の一つとも考えられる。

5. まとめ

性別役割分担や男女共同参画社会建設への試みは、法律の制定や労働条件の改善などによって進んできており、その影響は絵本の世界にも反映している。固定化した性別役割意識は徐々に崩れつつあることは作品の中にも見られた。これらの動きは丁寧にイラストを分析していったときに明確になったことであり、読者の無意識に従来のジェンダー・アイデンティティ形成とは違った効果を及ぼすことが予測される。これらの効果、及び定着についてはしばらく時間をおいてから別の視点から判断しなければならない。

引用文献

- 1) 武田京子「『こどものとも』に表れた性差」岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 第9号(1999)
- 2) 上野千鶴子「性分業／性別役割分担」(比較家族史学会編『事典 家族』弘文堂1996 pp518-519)
- 3) 久武綾子他 『家族データブック』 有斐閣 1997 p272より作成
- 4) 3)と同じ p271より作成
- 5) 日本子ども家庭総合研究所編 『日本子ども資料年鑑・第6巻』KTC中央出版 1998 p95より作成
- 6) 福音館の児童書目録(1996) p209
- 7) 「月刊物語絵本『こどものとも』500人のともだちできた!」(1997)
- 8) 安江リエ「おとうさんのアイロンかけ」絵本の楽しみ こどものとも457号折り込みふろく(1994)

引用した『こどものとも』の作品(テキスト・イラスト)

- 5号「なんきょくへいったしろ」瀬田貞二・寺島竜一(1956.9)
- 34号「だむのおじさんたち」加古里子・加古里子(1959.1)
- 39号「たぐぼーとのいちにち」小海永二・柳原良平(1959.6)
- 44号「かいたくちのみゆきちゃん」水口 健・坂本直行(1959.11)
- 79号「つきをいる」 君島久子訳・瀬川康男(1962.10)
- 85号「たろうのおでかけ」 村山桂子・堀内誠一(1963.4)
- 93号「ぐりとぐら」 ながわりえこ・おおむらゆりこ(1963.12)
- 110号「ぐるんぱのようちえん」西内みなみ・堀内誠一(1965.4)
- 136号「かわいいめんどり」 木島 始・羽根節子(1967.7)
- 180号「ぴちこちゃんのけっこん」木島 始・桂 ゆき(1971.3)
- 185号「まぐろぎよせんてんゆうまる」森下 研・金野新一(1971.8)

- 206号「いちごばたけのちいさなおばあさん」わたりむつこ・中谷千代子 (1973.5)
260号「おふろやさん」 西村繁男・西村繁男 (1977.11)
269号「せんたくかあちゃん」 さとうわきこ・さとうわきこ (1978.8)
290号「せかいいちのおんどり」 松野正子・太田大八 (1980.5)
328号「いってらっしゃーいってきまーす」筒井頼子・林 明子 (1983.7)
339号「おとうさん」 秋山とも子・秋山とも子 (1984.6)
369号「ちよろりんのすてきなセーター」降矢なな・降矢なな (1986.12)
371号「ぼくしごとにくんだ」 角野栄子・垂石真子 (1987.2)
380号「おとうさんといっしょ」白石清春・西村繁男 いまきみち (1987.11)
400号「おとうさんといっしょにおばあちゃんのうちへ」同上 (1990.3)
446号「ふくのゆのけいちゃん」 秋山とも子・秋山とも子 (1993.5)
456号「カンジカおばあさんのおきやくになつたうさぎ」内田莉莎子・小野かおる (1994.3)
457号「おやすみなおちゃん」 安江リエ・垂石真子 (1994.4)
468号「おなべ おなべ にえたかな」エヴェンキ民話・こいでやすこ (1995.3)
470号「ねぼすけスーザとあかいとまと」広野多珂子・広野多珂子 (1995.5)